

研究分野のキーワード：日本思想史，政治思想史，ナショナリズム，宗教史，教育史

## 研究紹介

江戸時代の思想史を研究しています。現在、三つの問題意識をもって、江戸時代の思想の展開史、ストーリーを描き出そうと考えています。

第一の問題意識は、なぜ江戸時代の儒学史が、中国や朝鮮とは異なる、独特の展開をしたのかというものです。中国や朝鮮では、官吏登用試験である科挙があつて、儒学の勉強をして官僚になることができたのにたいして、世襲身分制度のもと、江戸時代は、それを勉強したからといって、立身出世できる可能性はありませんでした。武士が支配する、いわば兵営国家のなかでは、儒学者は非常にマイナーな存在でした。この軍事が政治や経済、教育のすべてに優先する暴力的な国家のなかで、儒学はどのような役割をはたしたのか。そこには、中国や朝鮮にはない、積極的な役割があつたのではないかと。こうした問題意識をもって、儒学と兵営国家を支える思想である兵学との対立図式のなかで、一つのストーリーを描いてきました。

第二の問題は国学です。江戸時代の初期には、天皇の存在は限りなく小さく、農民や町人、武士にとって縁の遠い存在でした。ところが、幕末には、尊王攘夷思想が広まり、天皇が非常に大きな権威をもつようになり、明治国家の基軸となってゆきます。また、この天皇権威の浮上とともに、われわれは日本人である、というナショナル・アイデンティティも生れてきました。この間に、何があつたのかという問題意識が、近世神道や国学にたいする展開史を描き出す主題になっています。

そして、第三の問題意識は、儒学や国学、さらに蘭学のような、江戸時代の様々なユニークな思想が、どのような場所から生まれたのかというものです。その場所として、会読による読書会に注目しています。江戸時代、素読、講釈とともに、会読が広く行われていました。それは、複数の人々が一冊の書物を討論しながら読み合う読書方法です。江戸後期には、この方法で書物を読み合う、民間にさまざまな読書グループが生まれ、藩校や幕府の昌平坂学問所のような学校でも、人格形成を目指す学習方法として採用されていきました。幕末になると、この会読の場が政治的な討論の場に変化して、明治維新、さらに自由民権運動につながってゆきます。こうしたストーリーを描き出すことが、三番目の課題です。

江戸時代の思想史は、決して現代の私たちの世界とかけ離れたものではありません。むしろ、現代日本を理解するうえで、大切な鏡だともいえます。江戸時代の人々の声に耳を傾け、明確な思想史を描き出すことによって、私たち自身をよりよく理解してゆきたいと考えています。